特42
442

和茂
俊寛
松風
西行櫻
浮舟

十

東京圖書館

和書門	音樂類	函	四七架	二號	二二冊

東京帝國大學圖書館藏

賀茂
き水上寿ぎはてゝ
賀茂
宮居よ手賀
抑是い播
州室ノ明神ト
神祇ノ者
ゝり扱ヲ御ノ賀茂ト當社室
ノ的ノ神ハ一神ヲ
ぞ表申ハ
ぞ表ノ

御乃繁茂へと急ぐ（なり）
宝のとまりの（ふね）
樹衣色うしる（ふ）
もぬしほれ雲井や久かの月乃
影の山陰乃（ぶ）
そうく（宮居）
もを水のぷかも乃（行）

（ふね）
もくよ頼まい人のよもすがら
（ミテサレ）
（道）
きの影変て秋
（も）
ぶも涼しきタ
（浪）
水桶のぞ（ち）
と冷の（ぶ）
（早）
（振）
（ふ）
（ふ）

上ニ
東ヲ指シテ此所ヨリ入ベシ
汲ツヨウヤ清流の色もすし
き夏いかきやゝくじの森の梢より
初音ゆかしく子規なくそよう
やうで一番村雨の雲もかき
くもりつゝ夏さ水の門畏く
まひたりきぬ

上ニ
此所水汲ヤ寿ヤ人きりなく
見ル事此あつうまて見引ヤさぬ
中事ありて行くよりの山まつ
作ル　まよくは後ハいわか
見ハ播州室ノ明神の社獄ノ
去ヲて人かりて南社ヨ寄ヲて
ぞと是成行ぞとを見れあるべく

壇とつき白木綿と白羽の矢をたく
剪へ渇仰の者きたんとしてこれ
も行とやたるものもいつ（上ケ）拍子
室の明神よりれいと手向をしてい
やゝ日暮ぬる故矢ハ當社の神殿
ともに神おろしもゞ洗ぎ矢のちく
ありがたき所なれとなり世

（下）渇仰の者共へ罪人
きけるすれ拍子黄社の神殿
をして拝ましむ（汁）
此矢れは謂書く語り給へし
（テ）（下ケ）
ぬして神乃仕るをおさく敷今
きねぬおろく一年を動きしし昔
此賀茂の宮ゝ巻の民女をいひ人

朝夕おしほの過よりおくれ水をくみ
井よりまゐるゆゑ時ほとゝぎす白
羽の矢をうつ清き水に洗ふ桶よ
あるとき海ほとりに竜の形よりひ
ぬるもちひ懐胎し男子をまゝ
此子三歳とやしなひ成ぐるまゝとみて
父はとゝ人も此矢をとりて向ひま

ぶ矢即ち雷と名づくべしよりあり
井とあるぶ雷の井也　甚母
見こもかみやをあつて賀茂三とて
ろの井下とうや　ちやうはやをい
ちかうの弧の井根愚あるべよ
わきまへきいうまいさきの号やた
きの人の治めん御代をつき白羽の

ば百萬代のまゝ
ぶ
心なく　筆よりぶを
　　絵くきけいる絵や　扨
其矢ハのほまるよれとまの世よあ
ぬ矢さるもぶ外神ある謂ゆめよ
こよくく不審たゝ隅ハあ行
すも　心ゆくもむも濁るも
同し流きの様なよ　小ゆ行頼も

かるゝ乃　下ハ白門　上ハ賀茂
下　又其ゝるも　ゆるる名乃
石川やまゝ乃かゆのきよきれる
ゆく月もゝれを寿はてゝ山も
も濁るも同し江ぶゝるぬ心をて
仔鯨ひゝるゝきの年の矢乃早く
きるゝ陰ぶても後るぬ

きしの水流れもつき絶えぬを
ぎ向成きるウ　いつく水と汐ふくく
上北　うらやましいちきよきがものうら
せの水とゆかりあるらん　行く
とが岩根松うねつたつさくる瀧津流
上北　ふたつ玉川音ありて水やきふねり
水と知くみくる大井川ぐれ紅葉

雨ふる　雨のうてこれ紅葉ある
波もうつやなふる紅　清瀧川
水くまは高根深雪ときめなる
弱日まちあて汐よ　くまの音
羽の瀧浪い　うきてうつ入雪とも
色　嶽く桶も　入よと引も
光れひらを過ぐるも同し行方

きの日を今の世の現をとどろく歌
うるおらぐ濁りもなく氷もとの水
乃ゆるまるよ新乃清くまるよ
宮右難きはらすれが相よ妻信
誠ぢらすはめやかの人やうん　初とは
今は愚也ぜたらんや水垂よもも
ひき向へ向へ君を奇るの洗水

徳を告たらしめんと影を出らく
たらうや和歌の真をあらはさ
ハ法結やおあさ面よや水ありんぢ
計ハたらぬゆこのやうとあさ水う
しとばりて立まきれて水
かれよ水よきうや水うれなあり
よそう　芸ウる経乃れりかやお

我此ところ地をえらびて法界無縁
乃宮をたてよ。一子として相ほうこう
おろかなるやうの外徳あるべしやおも
ぐるあれば代もて守るあり　上地　まもれ
べしもろもろやお君のめぐみも今
此時　天安　時いまだなりときいたる
感應あきらかに影高倣如の相好莊嚴

まのあたりよりかかや　上元　二月十三日　上元月
山なみのうつくしき陰ぐうつ
ろうとうとり独をみよひしてもこと
とうとく腐ちをうほひおかよ
上元
山行まず勤懃してまのあたりある
わをいうちの外外来現給へ
はじめ上元　我当見ぐ切ちをまもる衣の道

ゑ雷乃神あり上地あるひハ諸天善
神となるつくべ虚空を飛行し又ハ
國土を雲沼乃方便　和光同塵
結縁の次第あり　皆ひれ法華経
風雨随時の上地　雲井の上地
ゑ雷の雲きりとうち　ひう上地
稲妻のいなびかりの露ゆ　やとる程
たよりなるいうつれ　雨ゆをこうして
ゆうくうそ音ハ　ほろくもろ
ほろどろうくとゆとろうひゆる
うゆの敵の時も来れハ五穀成就
も國土をたすけ　時ハ此
神徳と威光を引てすりまして
御祖乃神ハ乃の森ゆ飛去り

いとま乞へハ残る也雲きりを
おしつゝれ給ふもあやちようち
ちう給も天路よ道のほつく
虚空にあらはるをたまひきぬ

俊寛

俊寛ハ相国に仕へ申者にて候を
此度中宮御産乃御祈乃為
に非常の大赦行はれけるに国々
の流人赦免あるが中にも鬼界が嶋
の流人の内丹波の少将成経平判
官康頼二人ハ赦免の御使を下されしに其外

つて尚ぶと冤罪り鳴へ出る
第六
神をいそ[illegible]り鳴御れ神をいそ[illegible]り鳴
なきに顧ひもこの山ん見
元洲[illegible]冤罪り鳴の流への門
成經
冊成の才將成經
康頼
平判官入道
康頼二人り墨をくいせ我り勢よ
ゆ時無罪しあ伝三十三度乃
ぶかをおりと立ちをよをを半
ゆも牧たてゆ[illegible]を流乃ゆと
あれ可ゆもゆ[illegible]ゆ牧て
れゆの流りよ[illegible]や此鳴よ三無船を
勅清ト都より道ゆの九十九
慶の子を迄
ぬさを杖をつく宮

居と三熟野の浦に庵を
とゝ結び麻衣をたゝまるをたゝそのの
まゝに白衣をかゝ笠砂をとて散米
元元元元
ゆゝしくもかゝれのみをきして行よ
歩をとゞめまゝ世を
ぎして宅家に鳴音と地あるれ
異の暗きより くらき道をたゞよ

きゝ玉宅書眠雲母の地人を鶏
反宮不前乃枝寝蟬古木を抱
て鳴盡て頭をめぐらし俊實ら
ゐれとまられて康平行あまり成に俊
實をて渡りぬ是に八行乃為よは
出をいう まゝもち侍とゝめ
たゞ道中の其為よ酒を持て来

作貫
康孔

くれ　すも一酒とハ行ぬ北鄙よ
ゐくきりとぞ菊ぬきへや見ハ水也
見ハ伝ゆくんへた　ち酒とーすハ
ぎと見菊ハ水ぬれ醸酒みてあと
ゐるくき　白ゐすぬ理ゐりぬ
長月　時ハ重陽　而ハ山路　谷
水ハ　歌翌七百歳を色ぬ心を
ぬゐ深谷ハ水　言ハ　香かゐよゐも
菊を黄水ハ　心の底も志結
ぬぬゐくほと山路の菊ハ露のま
よ秋を年　遠る心もゐる酸而
ハ梅もいつを　ぬそ　裏ハきて又
秋ゐれ冬の水　ぬゐもも草木ハ色そ
志ゐ冬や　長志の昔や思ハ

行ようきてもいとまなくして時はすぎ
寺は所寺は所にて見物の去れば花ばかり
ぞ残りて五葉減色の木ども
やがてつるすの巻に石清水八幡
の流れもよし源氏水上我ものとも
中ニ元ナリ
物ことばかしこまりもいかに
早ニ元ナリ
やあのぶ殿は
やいとぶいりかうん
月日
ものよ洪鴻の流
元人の所にいたりて教学体を授
まりて
元ニ
其ニ元ナリ
やんぬ頃の康熙帝
康
行て中宮の産
つ法祈りのため非常の大赦行
つるよりの国の諸人教学有守の
も冠帯の儒人ひろく服

少将成經卒判官入道康頼二人赦
宣旨あるべきなり（レテ）行ひ俊寛僧都の讃
岐の国へ流さる人（レテ）康頼法名願西出家
なり（レテ）拙者筆者の過
罪もいまだ配所も同じ配所なり
なれども康頼成
經二人は俊寛僧都を流罪
なり（レテ）上洛鳥羽
殿へ参ぜらるべし
罪もいまだ配所も同じ配所なり
なれども康頼成
經二人は俊寛僧都を流罪
なり（レテ）上洛鳥羽
殿へ参ぜらるべし
罪もいまだ配所も同じ配所なり
なれども康頼成
經二人は俊寛僧都を流罪
なり（レテ）上洛鳥羽
殿へ参ぜらるべし

ひも清の高野に計ありて有様ありし
時を感じて心も涙をうきぶを恨
くに鳥も心をうきぶくらもも洗
鴻の冥界の鴻とやあれば冥あり高
みてと生きうの冥途なりたりひ
成冥ものと洗気おうきぶくらん天地を
動く冥界も感をるかもへれ気
ものを洗鴻の多獸もあれ我を
よや流をめて男のぶりやば
きよ法たる巻わをよりひとり同
法をぶりをしくぶきたくたが
經康頼とぶるる其名計ありも
を冊紙よやるをと巻をしてん
九僧都とも後賞たかきる文字へ

更よりて夢うつゝなるやうにおもひなし
よくとうつゝ
思ひ後寛の有様をみ
る社れなりきれ　時刻うつりて
まつ経康朝二人つゝやかみよ
とよ　かゝてあるべき事あらねは
よそのなきをきもとみ　捨て二人ハ
つゝ　僧都も母よりとて

康頼ハ法よりつきハ　僧都
ハ
ゆかあるまじとばもあらきかく云
ゆ　たゝくやかほやきの
わるとゝ　ゝのあきいぜめらハ
向ハ地ハ成ばハ情よ事てらハ
情も　あ母子ハ檜擢をよりと上
ハ　ハ命のかあるハよ

又立かへり出舟の纜に取つきひきと
むる　舟人なさけもなく押きつて舟を
ふかみに出しけれバ　せん方波にゆら
れながらたゞ手を合て舟よ舟よ　船よ
とてよばはれども遠ざかる後の俊
寛を　本の渚にひき捨て松浦
佐よ姫も我身にはよもまさじと声

も惜まず泣ゐたり　痛はしの
御事や我ら都によろしく申なをしやう
ずれバやがて帰洛あるべし
心つよく待給へ　帰洛をまてよと
のよばはる声も幽なる声も松陰
よりも聞えつゝ而ゆるを　聞や
かくて夕波の皆声として俊寛をと　申

あとさきもなく　かゝる御縁かな
しや是ハ誠か　あらくよ頼む
うつよ東てしくて　まてよくとう色
海あらし人夢よまとちうるさうつ波の
謡ある聲たてゝ再陰も數をきえ
てみえぬ身よきぬ絵きてえくえ
ありよきをと

松風

ワキ
是ハ諸國一見の僧にて候　我未西國を
みず候程に此度思ひ立西國行脚と
志て候　急候程に是ハはや
津の國須磨の浦とかや申候　又是成
磯邊を見れハ様有けなる松の候　いか
さま謂のなき事ハ候まし　此あたりの

人は寿りやと思ふ　（平九九）　梅の洗松ばかり

松村あるとて二人の男の旧跡や蒲

うや其外山中に堀きめぐらせし名ハ弱

日世のたるとて　むさくるしき色の松一本

緑の松をのこしたる中乃気ちよ　ばやうま

經人家ハ　て　ひ　ひ　ば　秋の月なり

ひとて　狂句　言　てい　の　山本　星

迄ハ程遠くハ行よ　昼成ル　成ル　堀屋

よ立ちと　一夜を明さやと　ひ　作

（セイ）　堀ら　車　ら　る　ぼ　ら　れ

ハよ　浪　寝　ら　や　る　浦　月　え

（ミテサシミ）　心　ら　の　松　ハ

浦ひ　た　と　れ

海ハすて　を　き　れ　た　行　平　ハ　中　細　言

（ニスニ）　開　吹　こ　ら　と　詠　ら　ば　ら　ハ　ま　あ　ら　乃

ゆくゆくは海士の家窪敵を
成通路に月より外なる事
うき世のわかれ
つばよりまさる海士の身
の濃りうねる磯の世を住とやいはん
うかりける塩汲車
独居よ思ひをほさねばうかりける
をうくれんかる世の中よりやまし
上三月
もしぼ月の出塩をいさやはかよく
歌をつくき秋の海ゆく思ひ車をひく
塩の泡よ物まるだまり水に返ると
いとつへき野平のまよ露あらば月歌
きもうすへきまよ見いつくよりも
つぐ多堂のもてなまらるよ朽増り引
秋ゆく
面白やあわれもあり

夕潮満ち来る海の呼こゑ幾よ世ぶ
ちいさ紀漁舟のつがを幾あるる月ぬ
がうの浦やあ島野が塩屋も何ぎも
宮が前の秋ありきを意きこの
よ久くやあ いたく塩を汲んとく
げ夕ちひの塩宮人 秋と結んて
扇よかき 志ほくみためとへ思へも

ようれとても ゆうべ海 よきてハ
人間かほ波ウヅ色の田鶴社を
立さりけ四方ハ霧も青くてお寒
すこ月 更行月社やうあき
ば色歌なれや燒志ほ煙うろきよ
ばつ之おと海古人ひうさ秋のこをとこ
さん松浦やち海の月よ

歌を汲うそ心あまを　吉キ地　さこ
遠き陸奥の具名やもろの志ろ海
賜う塩ずをもこうしあこきう南よ
塩　異いきの海乃ふるの浦二度
世ものもかやの村立のもを月よ
塩路や立をなるまかうれあるを河
家いなるほのれりきよ月ろうさられ

のや清ほの塩ふをうさうそと
人のやれもつきのうしりる塩
をはるきてうれ月社桶よあき
見ものも月入たるや姉や光も
月あり月ろうかきれ乃ろ
三塩乃ろの車よ月をのきく
ぎ其里ものの塩路ろあや　まこやの

主乃婦アてんが宿をかりやと思ふ
めるよ是成塩やのうちへ案内ヤ仆
扨みく渡りなそ是ハ諸国一見の
僧なてんが一夜の宿をかりと指ゆ
ゆべうよ其ヤうしたらいうよ旅人
のたれ入うが一夜のお宿と信ゆ 御りる
見すぼらしき塩やのうちは狭よお宿ハ叶よ

主よを面ヤてゆへへ
塩やの内見苦ゆ狭よお宿ハ叶よ
まきヤ信ゆ いやく見すぼらしき
苦かしひんが出家ヤ宿ハ平ま
一夜と明ちまて泊りと重てはやと
いやかゆひまし 指くば乃夜
歌よ見てまつ苦ハ捨人よりく

かゝる所の家ハ松の木柱に竹の垣ぞ
ゆかしきことゝ思へバ苫吹にあふて
かゞまりありきてやへ此方へ出入
急かれやけぶりハかすみにまがふて
始まるゝ宿ゝあるを所ハひつまれたりに
及其郡の旗に梅いおもくやてハ郡志
ある雑かぜ家しや様とひ須り名べき

身あかねバいつとも宿と定むべきず其上
此も所の浦に心ある人ハかゞみも備
て往べきかゞとらうに所へあれど所
の浦みをほまたせつめるところへと
行年も詠じ給ひしとありかし大行の
議へ一本の松のかげへ寄て久へハ
松帆村ある所乃旧跡とうやゆ

縁をぞ結ぶ帰京ひて法師ひつき
ぞ思ひきやわが村雨のもとをたてくへ
二人ともに悲しく行とやうに
みていふ（レテニスト上）言や思ひ入れあれば色
かよ顕きさよ袖やわがくるよ同
人ぞ入れあ袖ぬるるひて
れば執心ぬれえんふの源とぞ
さまら袖（ワキ）尚執心ぬれえんふの源とぞ
八洲世よあさくの言葉世よわくらの
言もあつひなく所詮富よ
人ハ二人世よ名を名乗人（二人上）恥りや
中ちんとすきハくハよごと同人も
あさ節の世よまこそ（元）ゑてこうを風
恨めりかりきるる　洲うハ行を

かけりつゝ山へきゝ見しかとうゝゝなる
おれ松陰の言ふまゝ跡やとれ
しまゝをつゝ松原村百二人れ女の幽霊
見送ればうとうゝ行平三ゝ
猫ばつきくれ所永ありひ月ゝ
を海の浦よりほをとふあ風し女
だとゝひゝゝれ来まつゝ形ゝ

名おまやとて松原村百と行よりの月
ゝもなくゝを海れ塩の「ヒテ」堀ゝ衰ゝ著
てかゝとれきあの「ヒテ」ゝたゝ也
三年もとゆきバ行平都ゝほ給ひ
「ヒテ」つ狂おて世とりやうゝ給ゝ
「ヒテ」恋ゝやまゝてもゝいつゝ世をと
つきれ松原も村百を祈ゝぬて

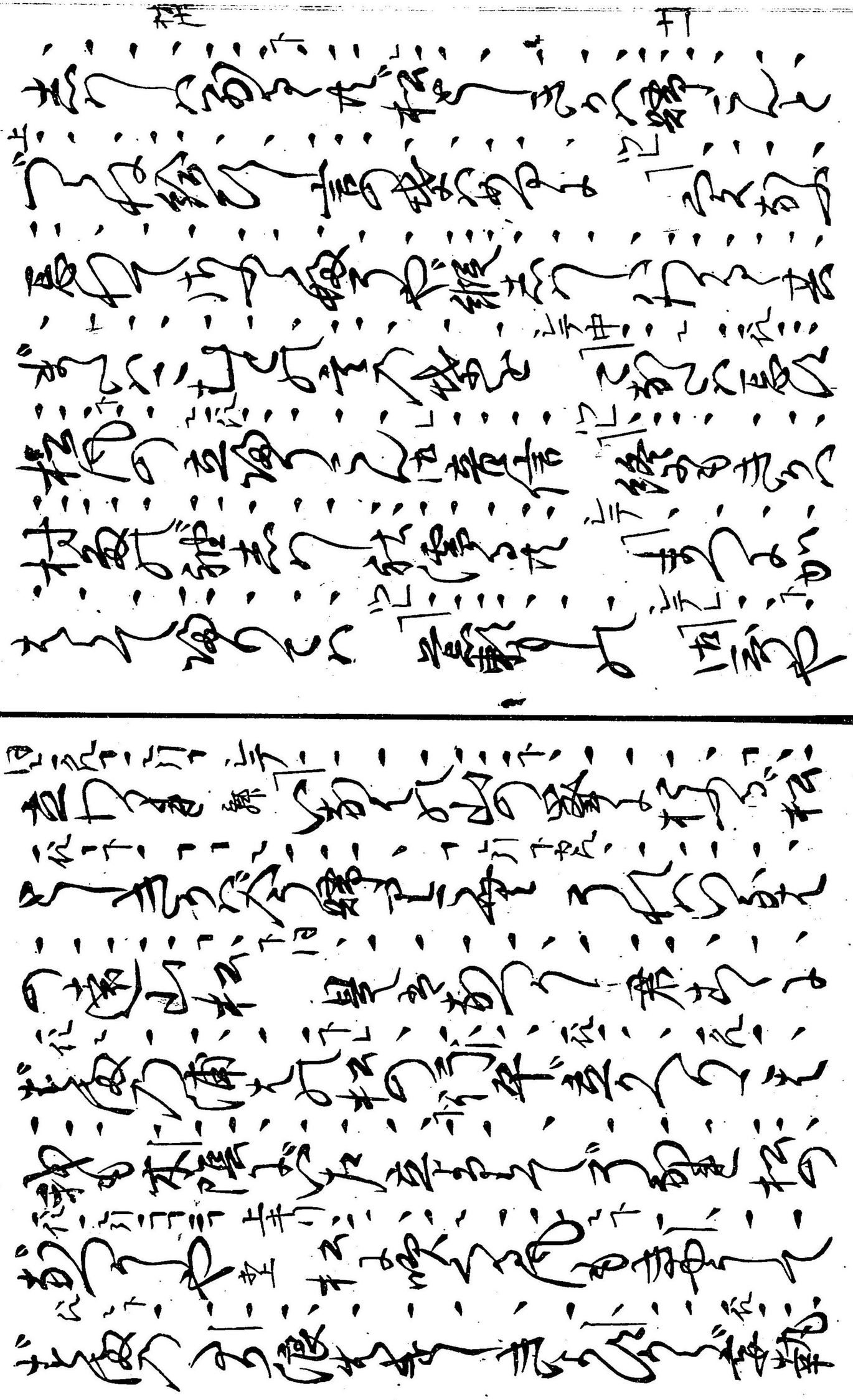
よしなやおぼすもなりね悪しきさまに思ひ
ぬりよつまつ跡ひくたひくまへ
上京にて
玄番の露も袖もひもしをれつゝ心
狂乱よりあれ衰の已れ日出づるひやはは
してれ邪の者ひまも涙れと気よ浮
ぐさ方なり　ヤヲハ気いかへを思いれ
をあつやや行年の中約言をせ宮よ

を西浦都へよりと信ず此の形見
とては立ちまり狩衣を袖　直衣へ
とも見をみる度ねびやまりの男女
堂と涙よ結ぶ家れまも長れへそ
あちさのあや笹ちへ入あ　あれ光
なくばとあ陸も方あんと乾燥も
理りや程男が狂へ深きれ　青ちよ

きて我れ知らず夜かきてそ軍を同
世野に行くひあらくそ長れ道もよし
あ[illegible]ばかりても直きくれば面影よ立
増り起きてわそ枕よ跡よわ恋の
責くれば[illegible]ばよりそ恋ふそ
かあるき

三東行けばえぬあるくれう
き野分もむ[illegible]忘のよりたりきを

上ぶう行平やあまとよ行平おそ有
り松風とめさ行けりつ[illegible]ふ
上
[illegible]ますや其心故よ[illegible]の罪も
[illegible]
上
[illegible]
下
給ふやあまとやあまと行平
上
[illegible]
上
[illegible]
上
[illegible]
上
[illegible]



の夢よりかゝるなり我ものとしてを
ひ給へるを風てゝ浪乃まの音ハ風
乃うゝ吹きて吹やうゝ乃山おろし
風路乃鳥ゝ泣くよ愛も泣あく
夜ゝ明きゝ村雨ときゝ今朝
ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ

西行櫻

ゝ待ゝ乃ゝ櫻かりゝ山路ゝ
急ゝ男ゝ加ゝ候ゝ者ゝ下ゝ京ゝ過
ゝ位ゝ者ゝ櫻ゝ我ゝ
ゝ乃ゝ花ゝ諦ゝ
山野ゝ日ゝ過ゝ日ゝ東ゝ地
ゝ櫻ゝ一見ゝ

山西行の菴室乃花感あるよう哀
及仏殿乃花乃人くをともなひ
ぶとう山西行の居室へと急ぐ
百ヨ島ちへつる素志ものとよう
おらたまりゆく日数へくばも逢
れ申あれや名よとくまつて花の故
ぶるもしらぬもをうたをよだまも花

成心ろれく河 急て行ぶ見さきや
西行の居室よ見えて指先に侍
作へ某菴室とちすまるいう
よ菴室やん 作ふく渡里にて
男
けんん見へ人乃者をていう。此方
菴室乃花感あるよう安ぶうく
見まてまつて作ぶうと花をへ

犯ケ
安き間にはかりてゝ　たゞ樓閣やゝ去る
うつぶきをんなとこそてとりてやうもと
男　半サ
まてゝ　智は物へ　乃ちゃん　女まれ
花いと来大中来の情よあらられ　ずの
月下化（林）晴れ　ぬやとうぶうもる
ゆくうよ　三位の夏もなく　宿底の
松の門　一聲は秋をもよほすか

ここ
ぎよ木間雲をうつうら見給法乃結
縁だりおるう宮殿もきた
犯ケ
おい花宮乃おりあるべ　表面白やい
日本一乃法きをんやうて中ちう
めゆよりい　都より洛庭乃花をた
半内
きよりやて　光色清ちゃ出ゆくい
仏とおろうとして　洛竜室れ華を

おりめんためよ曇り空なれば
やとりか　内に　（犯）　（平）　たちよる陽の花
臭いたくもとつひおりる西行の庵
室内に花も一本挿すとみる
あとに花かへりうちもきれる事
いつもあれば是遠遠来たる心ちと
ぶきをていかうひきぶりの柴垣

乃戸をひきあけへい見へ　（犯）　見くれば
いつよりかくやとよきは桜姫よりてん
へみをやせられたるうまてはよ立て
るわくはなかく　（男）　心ひかれ　（花見五六名ニ）　桜花
咲よりをくおそ中の山ろひより
みくまく此木のもとよたちよれ
（平限）　我人は花の本よ老花落

花見

なをと親しつゝ物の心をとゝのへる風よ

貴賤群集の中のいろくよ心の花もちり

花見

なをちく　もとの木かつゝる枝

かくれ所の山とい出　ちるゝ花の

花見

都あれへ　捨人を花よ行と隠

家のゝ所ゝ所ゝ　ちりて枝ばかり

よやゝ山ゝ　世のちりよ

あるあもとゝ　や捨て花よ世のほ八

ゝさ物といつゝ井のもみぢ

めゝよ面ゝ　もとゝ　ゝ心

ちゝ　もやゝ　社人去か

ゝゝ捨ゝと　夢ゝ　花ゝ

ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ

ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ

ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ

むれつゝ人乃くる乃ミそあたら桜の
とかにハありける　あたら桜のとかハ
くれて月よなるよのすれ大すよ家路
忘まてをろともよてよひ花のもと
卧して夜とたよ詠めはやん　埋木
乃人しれぬ身と志づめども心乃花ハ
残りけるそや花ミんとむれつゝ人の

くる乃ミこそあたら桜のとかにハありける
ふしきやなくちたる花のうつほ木より
白髪の老人あらわれく西行か哥を
詠ずるかる様だにもふしきなる行跡也
是ハ夢中乃翁なるか今乃詠哥
しつろを我も尋んためよまいりたり
うきや夢中乃翁とハゆめよまゐる

人のしづれば、よそても気く今の
詠哥の心をたつね候へハ歌よミしんの
あるやらむを　シテ　いや上人乃はずに行ら
不審のかゝへきあれたゞむまつ人の
くるのミがあたら桜のとがにハかりける
桜はたゞれやつハ行やらん　シテ　いや是ハ
浮世をいとふ山乃庵なるを貴賤
群集のこゝろをもとらし詠する
あり　シテ　あかうれあらし此は嘉しをかか
うきよとハへとよそ世とみるも山と
見るも唯其人の心にあり非情無
心乃草木の花に浮世のとかハあらし
平　實に是ハ理也かくやうにことハり
をしれバ知るさめ桜花木の精

然へ花乃精あらば世をも見よ春
乃樓の　花めいたる草木あれども
とりかきもれたる気ら
ひらと　うとうひたあり　そうや
老木乃花もちくあり枝ちらあ
たら樓のどうもまさうとやひらく
花の精をそはなりバ花こころあき草木
も花空のかりわとれめや草木国土
皆成佛乃法あらく　乃至草木
人乃法値遇よ　ひらくめくるの露
あまねく花檻前よ咲らく色いまいき
ひら島林下よ鳴そあらきて
乃地に元元元元　朝よ落花をみて相伴ていり
暮よ花鳥よ随つく一時よ帰京

九重にさけども花のやへ桜いく世の
春をかさぬらん「然るに花の名
高きはまづ初花をいそぐなる近衛殿の
いとざくら見わたせば柳桜をこき
まぜて都は春の錦燦爛たり
千本の桜を植ゑ置き其色を
所の名に見する千本の花盛り

雲路や雪に残るらん毘沙門堂の
花盛り四王天の栄花も是には
いかでまさるべき上なる黒谷下河
原むかし遍昭僧正のうき世を
いとひし花頂山鷲の御山の花
の色枯れにし鶴の林まで
思ひ知られてあはれなり清水寺

の地主の花も、松吹風の音羽山こゝ
はまた嵐山、となせにおつる瀧津な
み、までも花は大井川、井ぜきに
は雪やかゝる覧〽もやうすそ時
節つくる　〽後夜の鐘の音ひゞきそふ
そふ　〽あら名残惜の夜遊や、おしむべし
むべし、得がたきは時、あひがたきは

友なるべし、春宵一刻價千金、花に
清香月にかげ、春の夜の、花の
かげより明そめて、〽かねをもまた
ぬわかれこそあれ、わかれこそあれ、わかれこそあれ
〽まてしばし〳〵、夜はまださふかきぞ
〽しらむは花の陰なりけり、よそはまだ
をぐらの山陰に、残る夜はほのぐらの花

まるうの　夢へはめよきり　上月
さめよりもあらも雪も散しくや
花と踏くいおもく情け少年
の書の長月　湖よきりや菊はひて
松もおしく

浮船

昔より　昔へ諸国一見僧ゆく作。我
此狂へ初瀬　あひひ見ぬより都ふ
つほうやと思ふ　初瀬山ふ
きく暮し富もやく　桜原の
よそよ三輪の山ぶし　杉も立別
用とたよあらぬ　ぬぬやすよ狂

そなくて風のわたりやあやとぞう
ちの星のもゝそよまきりく急ひ行
よ月見くやや宮居乃星よそてゝ皆
やもらひなる所をも詠やと思ひ
栄つゝ船のうらはもゝ九つさかき浮
ゆう那　うきへ心の科うとてだう
世をかうつゝもおし　住てぬ

とみへうちの橋柱ぞうちのうち
き里ゆ岩ゆ露をうきゆ
て岩ゆ未もきちゆ心
を歌くゆりやよりくよりめおき
よ乃影たゝゆ　月見もうきよ
行寺のゝく弁ゆ行ひあへ
頼をかきてみ縄おくや世も

いのこまく　平付　めをよ見なる
世よ寿ア人きるれ　女付　此方の事
みてから行事ふくいそ　平付　此字治
の宝をひて去いるる人の信濃
ていそ妻はあ詰ア人　女付　何よ位ア人
先賜きみて　平付　妻きるもも
去ふ人去ふ　平付　此何よ浮

永ちや時の住ひとなり同し女　上ちれ
ばかあれた数みあるもあるきれ
ハいりてかさまてハたりちぬへき
平付
ちえ源氏乃物語世よ見へぬと
の紫乃ぷれさ人透てきる庵ほ
ぶよ物　鈴あるよ　女付　むつ　ぬをを
四季ちや宝乃ちをきりとひり人

色紅あれば花の色に行とも給ふらう
上哥 はるかきたよりは一の道の春の夜の
たちもれの下鳴く鶯を渡るを行
より霞の夕煙立つ月も雲に
あしより空の色々にて山は鏡をかけ
きえくもりなき世なれはあるもあを
みとりとと思ひ初めやく
シテ 浮舟

作 抑此物語
のはしめの妻御物語くなり
と申よし且くも妙にしてこの心
廣き誓ひのうちひとしきいさみのその
花の数々もあるみなれのつゆも
よきや歌よみき まつ此うちに名高き人
あまた住給ふもたくひある
此浮舟は薫中将のかりそめなりけるに

ゆひ名あり（クセ、ウヤ）人かもあつく
心ざしふかくて（ヤア）おほとうとひ給ふ
とぞいひける（ヤア）世の人（ヤア）ほめ
ぞ（ヤア）をとこ（ヤア）兵部宮
まさ（ウ）ひく寿て（ヤア）おはせ
のひとあき賞（ウ）人も悲しそい
まつて（ヤア）おはせ（ヤア）もいとひ（ウ）ひ

わ（ヤア）いまわや具よ（ヤア）梅も山ぶきも
所（ヤア）方様心よ高（ヤア）て有明月
豊（ヤア）狂なるよ（ヤハ）水の面も雪（ヤア）
船（ヤア）とめ（ヤア）かくて（ヤア）汀の氷（ヤア）
ちく（ヤハ）道（ヤア）を迷（ヤア）ひとうも（ヤア）
ぬ（ヤア）袖（ヤア）ぬ（ヤア）ぬ（ヤア）長（ヤア）ぬ（ヤア）
ぬ（ヤア）行（ヤア）る（ヤア）男（ヤア）ち（ヤア）晴（ヤア）の詠（ヤア）

も。涙の面や増さり給へ。とよつくよ思ひ
給ひ。此世よりなくもあるやと歎
き給へども。なほ世の人の要求ぬ
よきりく浮世人。見て浜
松の下に立ちて。なほ水に
可よりよ面白ひものまれ也。わらふ
栖を小野乃者。都のつくよりとひ給へ

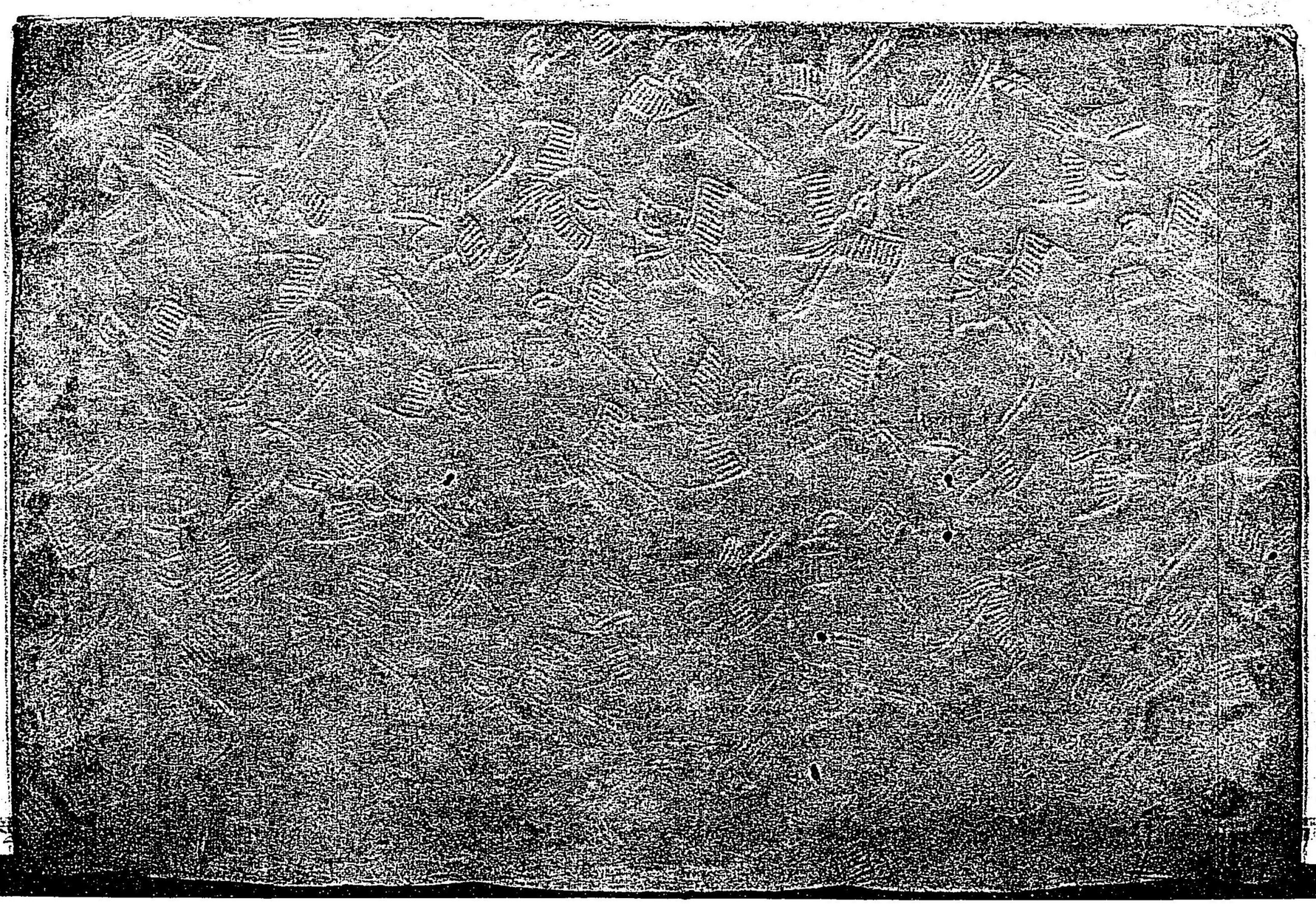
芝ゆきや行くらや。行くとたづねる
樵よび。梅小路をまてへ誰とか尋ぬべき
かれあり大ひえの松ぬ。ふるいお
きれ。横川の水ぬ。方をひし
さと書給へし。猫のきれよ
そひて。猫もあるなりなり法力を
頼ぬ。ひつく。あまをく待やちんと

ぶき方雲行方知れず成
よろ〳〵
つゝを富と定へき　所の名ちへれ
のまれなく草乃枕ハ野やこよひへ
寝よ經をとゝ。ほ法師とゝとりやく
なさ鼠ハ詩ぬも物。濃ノよゝ宮
めぬ浮舟のぱゝカと東ぬ物ぬ所

法や本より我ハ浮舟のゝ物わ
てゝ方より舟よゝ名ゝ名ゝと思ゝ
ゝ世世よゝもあゝやと明暮
思ゝゝ方ハ方ゝよゝ書
戸ゝれゝ出ぬ風ぬ吹ぬ
良ゝゝきゝゝよゝ男ゝ
きゝぱゝちゝひゝと思ゝゝ

命よ成ぬて　あつかきれされ事
きなく　れうれきもあ尾や
ほまりやあまりやあらもれ
小鳥のせいもを　此うを
ぶうへきぬ　大慈大悲のとうり
高くよひろきれとすよりかろ
ちうよをこ　ひうて出る目の

景色　ぬえとあつ　ちつ　ハ
やをよ　きたれよりきて　頼しよ
頼　まの　観音　慈悲　初瀬
ひたりよ　横川の僧　ちきれ
つふ野よ　あひ　もして
ものきの　夢のよ　ぬ
みをれほひや　ちの　ちの

うちも夢にあらはれみえ給ひし
法花をもてなすたよりに弔ひうけん
といひしに思ひのまゝに執心はれて
都率にむまるゝ身ときくかと
思へは夜るよりはしらしらと明ける
横川の杉のあらしや殘る杉の
花をやのこすらん

右之本者觀世太夫織部
章句眞本令版行畢
正德六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再校
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛